

司式:佃 雅之
奏楽:中井喜久子

前奏:「美しく装え、愛する魂よ」(J.S.バッハ)

招詞:真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。(ヨハ16:13a)

讚美歌:19「み栄え告げる歌は」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①詩編 107:28-30

28 苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと/主は彼らを苦しみから導き出された。

29 主は嵐に働きかけて沈黙させられたので/波はおさまった。

30 彼らは波が静まったので喜び祝い/望みの港に導かれて行った。

朗読聖書②マルコによる福音書 4:35-41

◆突風を静める

35 その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。

36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒にあった。

37 激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。

38 しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。

39 イエスは起き上がった、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。

40 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」

41 弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

祈禱

父・子・聖霊なる御神、あなたの愛と憐れみに満ちたお名前を心から賛美致します。

あなたは地上に生きる私たちの救いのために、その持つておられる全てを注いで、私たちに対する愛を明らかにしてくださいました。そしてまた、この地上に新たなる神の民の群れを創造され、教会の歩みを始めて下さったことを振り返り、その恵みの中に私たちを置いてくださっていることに心から感謝いたします。私たちにもあなたの恵みによって、信濃町の地が与えられ、伝道する教会として、世のための教会として、“全ての民を私の弟子に下さい”とのキリストの言葉に従い、あなたの宣教の御業に励むことが求められています。私たちの主よ、今日ここに101回目の創立記念日を覚えて礼拝することが出来ますのは、全てあなたの恩寵によるものです。今、この礼拝に参加をしています全ての者を祝福してください。私たちが、教会の伝道の開始から、これまでの歩みを覚え、聖霊が常に導いてくださったことを覚え、この礼拝において、改めて、感謝と献身の思いを固くし、悔い改め、謙った心で、“イエスは主なり”と告白することが出来ますように。私たちがその告白によって一致と交わりを深めて、あなたのご栄光を表わすために、聖霊に導かれて更なる歩みへと進み行くことが出来るようにしてください。この礼拝で、あなたが下さる新しい御言葉と新しい聖餐の恵みによって、私たちが、これからも、使徒の教え、相互の交わり、パンを

裂く事に、祈ることに、熱心であることが出来ますように。

神さま、アジアの諸教会を覚えて祈ります。あなたの名によるアジアの教会が、和解し、連帯して、あなたに与えられた夫々の地で福音を広く宣べ伝えていくことが出来ますように。あなたの名によって立てられた一つひとつの教会伝道所が、共にあなたを賛美し、祈りを合わせ、悔い改めて、神の国を待ち望む群れ、また神の国を先取りしたキリストの教会として、あなたの御用のために仕えることが出来るようにしてください。

今も生きて働かれている神さま。あなたの平和のご支配が、この地に遍く突き通されることを切に祈り願います。世界の国々が平和に向かって進むことが出来るようにしてください。全ての国が、武力や暴力ではなく、話し合い、互いに尊重し合い、互いに愛し合うことが出来ますように。そのために、謙遜と愛の心を持つことが出来るようにしてください。主よ、あなたの聖霊の息吹きが、この世界の隅々にまで吹きわたり、私たちばかりではなく、全てが新たにされ、あなたの御心に適う者となりますように。主よ、どうか地上に平和を来たらせてください。

私たちの主よ、今日この場の礼拝を共にできない兄弟姉妹のことを覚えて祈ります。あなたが与えてくださった教会の家族の中には、病のため、また孤独、寂しさの中で教会から遠ざかっている者もおります。しかし、いかなる者もあなたが造られたものであり、あなたが選び、捕えてくださった人たちであります。どうか私たちの愛する家族一人ひとりに、あなたが聖霊によって臨み、必要な時と場所において、慰めと励ましと勇気を豊かに与えてください。

神さま、今朝を立てられた説教者を感謝いたします。笠原義久牧師が聖霊の導きを豊かに受けて、あなたの口となり、福音の消息を力強く語られますように。そして、また聞く私たちの心に深く届きますように、あなたの助けを祈ります。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌:5「愛するイエスよ」

説教 「新しく船出する教会」

笠原義久

私たち信濃町教会は、今から101年前の1924年6月1日、当時の東京市大久保百人町263番地に構えられた高倉徳太郎牧師の住居の一階、8帖と10帖の部屋を空け払った広間を礼拝の場所として誕生しました。その前日、5月31日の高倉牧師の日記には次のように記されています。

明日はいよいよエクレーシアを始めんとす——この上に主の導きをたえず祈り求める。主の栄がこれによりて現れんことを祈るべきなり。

「エクレーシア」、元のギリシャ語では「エクレーシア ἑκκλησία」と言いますが、この言葉は「教会」と訳されてきた新約聖書の言葉で、「呼び集められた群れ」という意味を持っています。この最初の礼拝において高倉牧師は、初代教会の宣教に想いを馳せながら、真剣に「エクレーシア・呼び集められた群れ」、信仰共同体である「教会」、この「エクレーシア」への志を語り、“現代の教会の中心問題は、その量にあるのではなく、純真な福音的信仰による質にある”、そのように篤く語ったと言われています。その時、高倉牧師の念頭には、“ただひたすら御言葉のみに聴き従い、御言葉の宣教にのみ仕えることを使命とする純粋な「エクレーシア」形成への願いだけがあった”と、そのように思われます。

言うまでもないことでありますけれども、この101年の教会の歩みは決

して平穩、安閑としたものではありませんでした。“高倉牧師は、言うまでもなく、歴代の牧師、長老、また信徒の担った筆舌に尽くし難い労苦によって、厳しい苦境をなんとか乗り越えてきた苦しみと戦いの歴史であった”と、そのように言うことができるでしょう。

教会の歴史というのは、キリストのからだである教会の姿と形が、歴史の中に、この世界の中に、この地上に成っていく、キリストの体がこの地上に成っていく、その過程、経過に他なりません。私たちが、今日、この教会の創立を記念する、新たに思い起こすということ、そのことは今この時、私たちの信仰と教会の現実というものを見つめ直し、行き詰まっている宣教の現実立ち向かっていくことだと思います。それはまた、神の恩寵を、恩寵と召命の共同体であるこの教会を通して訴えようとした創立者高倉牧師の衣鉢を継いでいく、そういう志を新たにさせられることだと、そのように思います。

さて、お読みいただいた『マルコによる福音書』、主イエスと共にガリラヤ湖を舟で渡りつつあった弟子たち、彼らは突然の嵐、突然の突風に遭って恐れ慌てふためいていました。その時、その舟に居たイエスが、その風も波も鎮められたという、本当によく知られた物語であります。

冒頭の35節、“イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。”とあります。“弟子たちは、私たちキリスト者は、また教会は、主イエスと共に船出する者たちである”とされています。しかもそれは主イエスの“向こう岸へ渡ろう”という呼び掛けから始まる出来事です。神は、神の方から私たちを知り、先ず先手を打ってくださるお方です。私たちの救いの事実においてもそうであるし、私たちの日毎の生活においてもそうです。神は常に私たちに先立ち行き給う、そういうお方です。イエスが“向こう岸に渡ろう”と、それは神が私たちに先立ち給うお方であるという、その事実を伝えています。

ところで、私たちが立っている“^{こちら}此方側の岸”というのはいったい何でしょうか。言うまでもなくそれは、人間の罪が支配する暗き岸です。恐れがあり、サタンが力を揮っている脅かしの岸です。不義や悪意、争いや憎しみ、不誠実や無慈悲の支配するそういう岸です。あるいはまた、自分だけを“清し、高し”とする傲慢が横行する岸でもあります。この岸を後にして“向こう岸に渡ろう”と主は呼び掛けられます。主イエスはただ口先だけでそう仰ったわけではありません。この呼びかけの御言葉は、主ご自身の十字架によって裏書きされています。“此方の岸に繋がれているあなた方の手枷・足枷、罪の奴隷となっているその鎖は既にわし・イエスの十字架によって断ち切られている、あなた方は解放された者である、罪の支配から解放された者である。罪の奴隷となっているその鎖、それは既にわし・イエスの十字架によって断ち切られている。あなた方は既に解放された者なのだ。自由な者なのだ。さあ、だから向こう岸に渡ろう。”“私たちはこの主の招きに応じ、十字架による解放を信じ、決断を以て主の航海の一員に加えられた者である。”そのように語られているのではないのでしょうか。

この航海には、弟子たちがそうであったように、様々な過去、様々な人間的違いを持つ者たちが乗り込んでいます。けれどもこの主イエスを船長とし、頭とし、救い主とすることにおいては皆等しく、また教会であるこの船に自らの生と死を託しているということに変わりはありません。教会という船に乗る全ての者が船長である主イエスを信じ信頼して、各々その持ち場に就き、船長の指示を受け、また船長に尋ね、夫々その賜物に応じて、またその達し得た所に基づいてその務めを果たすのです。夫々の者が、パウロが言っているように“キリストの体の部分として、足であり手であり目

であり耳であって、誰一人として不必要な人はいない、全ての者が夫々に使命と働きの場所が与えられている”(Iコリ2:12以下)のです。私たちはそのようにしてキリストと共なる航海をしつつあるのです。

弟子たちは主の招きに応じ船出しました。舟は湖の上を走ります。聖書の時代の人々にとって、湖もそうでありますけれども、海というのは常に神秘的なもの、危険なもの、あるいは隙あらば人を呑み込もうとする恐るべき魔物の住処^{すみか}であって、正に恐怖の対象でもあったのです。波の逆巻く荒海はしばしば乱れた罪の世のシンボルに譬えられています。船である教会は、また私たち一人ひとりには正に、そのようなこの世の真っ只中に置かれている。しかしこの世の真っ直中、そこそこが教会の場であって、それ以外の私たちの場はないのです。

この航海の中で私たちの為すべき第一のことは、海の具合を見て、波の具合を見て、自分の対処の仕方を決めることではありません。もし私たちが各々そのようにするならば船を支配するのは、唯、混乱と無秩序です。そのでは滅びへの船旅になってしまいます。私たちが航海の中で、船に乗っての為すべき第一のことは、ただ船長である主イエスの御言葉を聴き、主イエスに信頼し、その主に従うことです。

私たちにはしばしば自分たちを取り巻き、自分たちが立ち向かうべき海であるこの世の事情や事柄が最も大きい問題であるかのように見えます。しかし本当のところ、私たちににとっての一番根本の問題は、神の問題ではないでしょうか。教会が最後究極のところで責任を負っているのは主イエスに対してであります。

船の乗務員としての第一のことは、船である教会にとって第一のことは、船長である主イエスの御言葉に聴き、それに責任をもって取り組むということです。主の御言葉を聴いて、そして自分の持ち場に就く。そこに於いて私たちは初めてこの世の様々な問題もキリストとの関係に於いて自からの問題となるのではないのでしょうか。キリストによって与えられた問題ですから、それがどんなに小さく見えようとも、それは真剣なものとならざるを得ません。それは自分好みとか、選び取りの問題ではなくて、事柄はキリストに対する忠実、信実、誠実の問題になるからです。私たちが本当にキリストに忠実なのか、誠実なのかということを問われているのです。

さて、このようにして主イエスと共に船出した弟子たちでしたけれども、順風に帆に孕む航海ばかりとは行きませんでした。激しい嵐になり、波が“ザブザブ”と打ち込んで来て今にも舟に打ち込まれそうになってきました。ガリラヤ湖では北から吹き下ろす突風がしばしば小さい嵐を巻き起こすことがあるようです。ガリラヤ湖は海面下200mという低い場所にあります。天気の良い暑い日には太陽が上空の空気を熱して、空気が上に昇り希薄になることがあるそうです。そうなる湖の両側の斜面から突如として突風が吹き下ろすということが起こると言われています。「しかし、イエスは艫(即ち舟尾)の方で枕をして眠っておられた。」と聖書は記しています。おそらく舟尾の方は一段高くなっていて、まだ波に洗われていなかったのでありましょう。非常に突発的な出来事に直面して弟子たちはいったいどうしたか。

実は38節の「イエスが眠っておられた」、この言葉と「弟子たちがイエスを起こした」、この言葉との間には若干の時間的経過があったのではないかと思います。何故なら弟子たちの中には、このガリラヤ湖を日常茶飯の働き場所としていた漁師もいたわけですからその弟子たち、漁師であった弟子たちは日頃の鍛錬と技術にものを言わせて、この嵐に遭遇し八方手を尽くした

と、そのように思われます。ところが今回の嵐は彼らの経験をもってしても克服できない大きな規模のものだったようです。いよいよ舟が危なくなつて来て彼らは、そこでイエスを呼び起こしにかかったと思われます。

主イエスご自身が乗っている舟ですら突風に大きく揺れ動くのですから、私たちの乗っている小舟が波風に翻弄されるのは或る意味当然のことでしょう。しかしこのことは逆に言えば、私たちが揺れ、行き悩み、危機の中にあるときには、主イエスもまた私たちと同じ境遇の中に身を置き、その労苦を共にしてくださいということではないでしょうか。自分一人が苦しんでいると、そのように思ってはならない、自分一人で悲しんでいると思ってはならない、主と共に私たちの苦しみや悲しみやその痛みを共にしてください。主はご自身には釣り合わない、勘定には合わない軛を私たちと共にしておられる。このことは主が私たちの低きにご自分を合わせてくださるということによって、私たちが主の高みにまで引き上げてくださるということに他なりません。そのとき私たちの苦しみは慰めに、悲しみは喜びに変えられ、慰められつつ苦しみを担い、喜びつつ悲しみを担うことが出来るのではないのでしょうか。重荷を負うて労している者を休ませてくださるのは、ただ主イエス・キリストです。

弟子たちはイエスを起こして「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言っています。これは確かに逆上した言葉です。「自分たちがこんなにも困っているのに、あなたは何と軽率にも眠っておられるのですか」、そういうイエスに対する非難めいた調子が感じ取られるのも事実であります。しかしここには弟子たちの出遭った困難や危機が如何に深刻かつ重大なものであったか、また弟子たちがともかくもそのことをよく自覚していたことを窺い知ることが出来ます。それが人間としての弟子たちの限界であった。けれども彼らはそこで、諦め、放り出し、自暴自棄とならなかつた。彼らの言葉は確かに逆上し整わないものであった。しかし彼らはそれによって主に助けを求めたのです。この言葉はある意味、彼らの祈りの言葉です。「主よ、助けて下さい。信仰なき私を憐れんで下さい。主よ、神のご支配と確かな救いのご計画を私にも見させてください。主よ、どうか立って嵐を治めて下さい。」彼らは心からの精一杯の呼び掛けを主イエスに為したのではないのでしょうか。

自分の生命のことで、また自分の生活のことで、このような嵐に見舞われたとき、私たちは本当に心を開いて、何の^{てい}衞いもなく、ただひたすらに神に対して私たちの一切を率直にぶちまけているのでしょうか。弟子たちは、正に、そのような状況の中で、神に対して率直に心を開いて何の衞いもなく、そのことを率直に神に対してぶちまけています。私たちもまた、私たちの一切を率直にぶちまけなければならない。主は本当にその事を私たち求めておられます。その時、主イエスは「起き上がって、「黙れ。静まれ」と、風と波を取り鎮めてくださいます。無論それがどんな形をとるかは一概に言うことは出来なんでしょう。それは夫々の人が置かれているその時々々の状況や環境や条件や事情によって異なると思います。しかし、私たちの一切を率直にぶちまけ、「神さま、あなたの御心を表してください」と、そのように申し上げるとき、私たちはこの「黙れ、静まれ」という御言葉を確かに聴く、ここではそのことが本当に約束されているのではないのでしょうか。

主イエスは風と波を制することの出来る主です。勝利の主です。しかしそのリアルな目に見える勝利は私たちの期待している限られた時間の間には起こらないように見えることもあります。また私たちが助けを求めても一向に目に見える助けが神からは来ない、そのような嘆きを持つこともあ

ります。けれどもそこで、「だから、神は無いんだ、神は死んでも同然である、もう信仰も何の意味もないのだ」と、そのように口走ってしまうことは私たちには赦されないのです。

そうではなく、神は私たちを決して見捨ててはおられません。何故ならイエス・キリストは「ただ眠っているように見えるだけ」、その時にもイエス・キリストは私たちと確かに一緒に同船しておられます。私たちは神の力の支えの中に決定的に留め置かれているのです。

生命の主、キリストが同船しておられる教会という船、教会の創立を新たに思い起こす、新たに想起するこの日、私たち教会は、また、その肢である私たち一人ひとり、神から託された使命を担い取りながら、勇んで船旅を続けるよう呼び掛けられているのではないのでしょうか。突発して起こるかもしれない海上の嵐を予期しながらも、外観はどのように見えようとも、キリストはなお船の中に留まり給う。その確信を常に失うことなく歩み行きたいと、そのように切に願うものであります。

お祈りします。

主よ、語りました言葉を、あなたの聖霊の働きによって生ける生命の御言葉にしてください。この時間の中で、御言葉が私たち全てを慰め、勇気づけ、励まして下さること、そしてこのことが、私たちの間に、近くや遠くのありとあらゆる場所に起こり、復活と生命の約束を聞き取り、掴み取るようにさせてください。主キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:516「主の招く声」

聖晩餐使徒信条の告白 和解の挨拶

讃美歌:81「主の食卓を囲み」

献金・感謝(神藤重臣)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

恵み深い天の父なる神さま、あなたの御前にこうして礼拝を献げることができ、心から感謝いたします。今日は主イエス・キリストの十字架と復活の恵みを覚え、聖晩餐に与ることができました。この深い愛と救いの恵みに与れたことを心から感謝いたします。また、健康を与えられ、この場に集うことができた兄弟姉妹だけでなく、様々な事情で教会に来られなかつた方々も、ライブ配信を通して共に礼拝を守ることができたことを感謝いたします。

今、お献げした献金も、あなたからの恵みの一部を感謝を以てお返しするものです。どうかこれをあなたの御国の働きのために用いてください。

そして今、戦争や災害、貧困、病、様々な差別など、苦しみや重荷を負っている人々に、あなたの慰めと助け、平和と希望がもたらされますように。私たち自身もあなたの愛と平和の器として用いられますように、どうかお導きください。そして、主が教えてくださいました。「主の祈り」を共に唱えて新しい一週間の歩みの始まりとさせていただきます。「主の祈り」…アーメン。

派遣・讃美歌91「神の恵みゆたかに受け」

派遣と祝福(司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。会衆:私がおりにいます。私を、お遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。)

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりが、永遠にあるように。アーメン。

報告：(1)教会学校：来週花の日献金、次週全体祈禱会「感謝の祈り」カード持参の要請。(2)

管理委員会：補修工事工程表案内、(3)ホームカミング集会案内

後奏：「フォーガト短調」(D. ブクステフーデ)